



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第33号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2012年3月20日
〒480-1197 愛知県長久手市片平9番地
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第33号ニュースレターの目次

- 第25回定例セミナー報告 1・2
- 学生感想文 3
- ジェンダー・女性学研究所創設当時のこと 4
- 國信潤子先生の思い出 5
- 第5回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 6
- 日進市市民協働課主催 平成23年度男女平等啓発事業 団体向け研修
リプロダクティブ・ヘルス/ライツ研修に参加して/第4期連続講座のお知らせ 7
- 2012年度ジェンダー・女性学関連授業紹介 8

長久手キャンパスにおいて2011年11月24日(木)に第25回定例セミナー「ジェンダーの視点でみる韓国ドラマ」を開催いたしました。以下はその概要です。

第25回定例セミナー

ジェンダーの視点でみる 韓国ドラマ

講師 山下 英愛さん
(立命館大学非常勤講師)



山下英愛先生は、韓国の名門大学である梨花女子大学大学院女性学科で学ばれ、その後のご研究の成果を『ナショナリズムの狭間から—「慰安婦」問題へのもう一つの視座』(2008年、明石書店)として発表されている。現在は立命館大学で韓国文化や韓国語の授業をご担当されている。

ご講演は、1 韓国ドラマと女性、2 家父長的文化の再配置、3 ドラマのリテラシー活動の必要性の

3部構成であった。まず、日本で有名になった韓国ドラマ『冬のソナタ』は、日本の特に中高年女性たちが隣国、韓国の文化と身近に接するきっかけとなったとし、日本での韓国ドラマの影響について話された。韓国女性政策研究院研究員イ・スヨンさんが韓国ドラマ15作品を分析し、日本の女性にもインタビューを行った結果を参考にされながら、韓国ドラマの女性像が概ね受動的に、男性像が現実とはかけ離れて理想的に描

かれている点、2000年代からは韓国女性の社会進出を反映して、主人公の女性が刑事や大統領となって社会で活躍する作品が増えてきた点、家族関係の密度が濃く家族主義ともいわれる韓国社会を映す韓国ドラマは、家族のしがらみがなく結婚への介入もなくなってきている日本の女性にとって、昔はあって今はないものへの郷愁と失われた純粋さと感動を伝えるものとしてとらえられる点にふれ、さらに韓国をはじめとするアジアの国々、そしてそのアジアの一員であることを再発見させるものであると紹介された。

次に複数のドラマの特徴的な場面を実際に示しながら、ドラマの意味するものについて述べられた。たとえば、家族を第一に長年尽くしてきた主婦が家族に突然「休業宣言」をする作品は性別役割分業への反発を示すものであると説明された。『冬のソナタ』では、主人公の母親は家父長的社会において未婚の母として苦勞し、私生児を差別する韓国から米国へ息子とともに移住し、記憶さえも書き換えさせるのである。このことは、現在でも出産後、海外養子を選ばざるを得ない未婚の母親に対して、一部の施設で出産前に海外養子とすることに署名をさせている現状からもわかるとお

り、家父長的文化を背景としているとされた。ドラマの文化翻訳についても触れられて、日本では韓国の文化を理解せずに韓国ドラマが視聴され、韓国語のセリフが日本語翻訳されることによって、その意味するものが日本文化に書き換えられていると指摘された。

最後に、ドラマの内容へのモニター活動について紹介され、1990年代後半から女性運動団体や市民団体が本格的に活動しはじめたこと、中でも女性民友会がドラマに表れる性差別の場面の分析や登場人物の外見と役割の分析を行なっていること、韓国女性民友会メディア運動本部によって「性平等の観点による放送審議ガイドライン」が提言されていることを紹介された。

ご講演の内容は、本学ジェンダー・女性学研究所にとってたいへん有意義なテーマであった。韓国ドラマの場面を実際に見せていただきながら、ドラマの分析方法の一端を知ることができた。学外からの参加者も含めおおよそ100名が熱心にお話をお聞きし、その後も活発な質疑応答が行われ、盛況のうちに講演会を終えることができた。

(文責 IGWS 運営委員 菅野育子)



学生感想文

渡邊 萌

韓国ドラマの面白さの一つに、韓国の社会を反映していることが挙げられる。しかし文字数などの表現の制約や、日本人が理解しやすいように表現を変えられている字幕により、その面白さが正しく伝わっていないということが明らかとなった。

この字幕の表現を変えるというのは、年配者に対して敬語を使わないで年少者が話しているように書かれたり、韓国にはあまりない「女ことば・男ことば」が用いられていたことなどである。前者は家父長制など、年長者を敬う韓国の文化を無視した行為であり、また後者はまさしく日本の言葉遣いにおけるジェンダーが表れていたのである。これは、日本語の字幕を通じ、韓国の文化が日本のジェンダー秩序に置き換わり、韓国ドラマが日本のドラマとして再生産されているといえる。これまで私たちは何も違和感なく受け入れていたが、韓国ドラマをほんとうの意味で楽しんでいるのではなく、理解しやすい上澄みだけを味わっていたといえるのではないだろうか。

また、ドラマの海外への普及は、ジェンダー要素の拡散に繋がることでもあることを学んだ。韓流ブームなどにより、ドラマは現在、海外に対する貿易商品となっている。そのため、韓国はガイドラインを導入し、より良いドラマを作る努力をしている。しかし、前述したように輸入先が自国の文化に則って字幕を作成してしまうと、無駄となってしまう。そのため、ドラマリテラシーやジェンダーへの意識は輸入先にも必要なものなのである。

今回のセミナーでは、ジェンダーやそれらが含有する問題について学んだ。その中で、日本の字幕についての問題点も明らかになった。異文化を理解し、字幕に生かすことも大切だが、その根底にあるジェンダーについても認識することが重要である。これは決して字幕作成者だけの問題ではない。視聴者の私たちは、受動的に視聴するのではなく、楽しみながらも問題意識を持って視聴する姿勢が必要なのだと感じた。

(本学人間情報学部人間情報学科2年)

石津 大輔

私は「女性学・男性学」を受講しています。この講義では様々な視点からジェンダー問題を学んでいます。しかしジェンダー問題は見えにくく、なかなか身近に感じる事ができません。こういう思いを持っていたので、今回の講演は身近な例を感じとれる時間になりました。

韓流ドラマに対して、どうしてこれほどまでに流行っているのだろうと疑問を持っていました。ドラマは家の中で手軽に見られるもので、主な視聴者は女性です。これは女性が家事や育児で家に縛られていることを表しており、ドラマを見ることにより日々の家事への不満を忘れさせてくれるからではないかと考えました。外へ働きに出ている女性が増えているというのに、日本中で韓流ドラマが流行っているのは、まだまだ家事育児に専念している、させられている女性がいるということの裏返しだと思いました。

また、映像資料にあった「母さんに角が生えた」をみて、放送していいのかなと思いました。韓国はとて

も厳しい家父長文化の国だと見聞きしたことがあるからです。その韓国で、家事だけで一生を終わりたいくないから休暇を求めるシーンを放映したということは、女性の立場について多くの人に考えてもらいたいという思いが込められているのかなと感じました。そして、この思いは他人ごとではないとも思いました。日本にもまだまだジェンダー問題があります。講演の最後に山下さんが、場の提供が大切だとお話しされました。これを聞いてジェンダーを取り巻く環境を知ってもらうことが大切だとわかりました。ジェンダー問題は目に見えるものが少ないです。多くの人に気づいてもらえば、隠れている問題に目が向きやすくなり、相手を思いやる気持ちが生れます。一人ひとりがこうした配慮をしていけば、ジェンダー問題はなくなっていくと思います。私も家族や友人に対する配慮を持ち、思いやる気持ちを広めていきます。

(本学メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科1年)

ジェンダー・女性学研究所初代所長で今年度まで運営委員をなさっていた國信潤子名誉教授が2011年9月に本学をご退職されたことは研究所にとって大変残念なニュースでした。これまでの活動状況などお話しさせていただきたいことはたくさんありますが、先生のご体調を考慮しながら1994年の研究所開設（開所は1995年）当時のことをふりかえっていただきました。また本学副学長石田好江教授と富安玲子名誉教授が國信先生の当時の活躍ぶりをお寄せ下さいました。

ジェンダー・女性学研究所創設当時のこと

本学名誉教授 國信 潤子



ジェンダー・女性学研究所（以下、IGWS）創設当時のことを思い出すまでに、記憶の薄れないうちに、記録してみたいと思う。2011年夏に体調を崩し退職した。IGWSより、そのニュースレターに設立当初のことについての記事をとのお誘いをうけた。体調管理に追われる日々ではあるが、何とか一つの記録として残しておきたいと思う。

まず、本学と私の繋がり、1991年「現代社会と女性」という総合講座を開くのでその一部を担当してもらいたいという誘いが当時の英文科教授の大野光子さんからあったことに端を発する。当時は日本において女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃が政治課題化しつつある時期であった。本学の総合講座「現代社会と女性」も、女性の社会的役割の変容、女性差別撤廃条約などの紹介を主とした講座であった。こうした話を初めて聞く学生にもなるべくなじみやすくするため、異なる領域の講師を巻き込んだので、古典的(?)女性役割を説く先生も中にはおり、「女性は薪でご飯が炊けてこそ一人前だ」と講義したとのことで、女子大学だった当時の学生たちから「頭が混乱する」との指摘もあった。

研究所設立の契機はこの講座のためのテキスト作成にあった。総合講座において資料として『現代社会と女性「開発と女性」テキスト』（大野光子・國信潤子編、1993、愛知淑徳大学）という女性差別撤廃の世界的動向を事例的にまとめた冊子を作成し、このテキスト販売を学内外に行い、社会教育の教材としても活用した。その売り上げを大学に還元したところ、経理上適切な項目がないといわれ、それでは研究所をつくり、そこに項目を立ててくれという案をだしてみたところ了承された。名古屋地区でも女性学への関心がよせられるようになり、研究・教育活動を広げたいという長年の教員たちの要望が実現した。大野光子、富安玲子、石田好江などの諸先生方や私の声に小林素文理事長が理解を示してくださったのである。さらに長久手に新たな研究棟の建設があり、その2階に研究所の場所を確保した。こうして本大学付属のジェンダー・女性学研究所設立となり、初代研究所長を私が担当することとなった。本学のIGWSは東海地区では初めてのジェンダー・女性学研究所であり、かつ設立当初は日本全国でも男女共学大学に設置されたこの領域の研究所の第一号であったことは記憶しておきたい。

大学所属の研究所である以上、組織形態の学際性、教育と研究のバランス、講座と単位取得講座との関連性などに配慮が必要であった。当時の東海地区では「女性学」「ジェンダー論」ということば自体まだなじみがなく、「それは何を学ぶ学問ですか?」と学内のみならず、地方自治体の担当者からもよく聞かれたものだ。1995年から男女共学となった本学としては男性学も重視し、男性学の集中講義も開設、現京都大学教授の伊藤公雄先生にも講義していただいた。また身近な東海地区の青年の男女共同参画にも取り組んだ。青年層の悩みとして、生き甲斐発見、自分探しも重要なジェンダー課題だった。女性がとかく結婚をゴールとしてその後の人生設計が具体的に想像できないことは高等教育機関としては問題である。広い視野で男女の新たなライフサイクルを創造するためにも、国際的な女性学会との情報交流は有用だ。私が2年間研究で滞在したカリフォルニア大学バークレー校の女性学、ジェンダー論の教員たちと連携し、当該大学のカリキュラム構造、女性学講座の修士までの単位構造、フェミニズム運動との連動なども参考にセミナーテーマなどを決定した。

学生たちは自主活動組織をつくり、恋愛、結婚などについての学生意識調査を実施し、まとめた結果を愛知県の女性週間の催しで発表した。この活動については中日新聞などでも紹介された。学内での認知度が低く、ジェンダー領域への関心を掘り起こすためにも学生たちが何を悩みとして持っているかをモニターした。そのとき、自分探し、就職しても何をしたいか不明、結婚がゴールなどの声があった。それらをセミナーテーマとすることもあったし、主婦の役割変容などをとりあげた時には学内外の女性たちが夕方のセミナーに参加した。

ジェンダーは今後もグローバル化する大学教育において研究者の新テーマ開拓のためにも重要な領域だ。男女平等が一見根付いた現在でも、大震災後、経済低迷の日本社会にあって、卒業生女子は就労継続難、育児休業取得によって職を追われるなど差別の現実を改めて体験している。グローバルな視野をもったジェンダー新領域の開拓は今後も重要で、あらゆる知識の領域にジェンダーに敏感な視点をもてる若者を育成してゆくことは大学の重要な社会的役割であると思う。

ジェンダー・女性学研究所の前半期と國信先生のジェンダー平等への思い

本学副学長 石田 好江

昨年9月、國信潤子先生が定年を待たずして病気のため退職された。ここ数年、悪化する病状と闘いながら、先生らしく気丈に授業や校務をこなしていただいただけに残念でならない。拙稿では、ジェンダー・女性学研究所の所長として9年間にわたり研究所を軌道に乗せるためにご尽力くださった國信先生に感謝しつつ、國信先生が関わった研究所の前半期をいま一度振り返ってみようと思う。

【研究所開設初期】

研究所が開所された1995年という年は、国連の第4回女性会議が北京で開催され、日本からもNGOフォーラムに6000人が参加するなど日本の男女平等に向けた動きが最高潮に達した年であった。したがって、共学大学初のジェンダー研究所の設立は大学分野だけでなく、この地域の女性たち、とりわけ社会教育の場で女性学を学び、力をつけてきた女性たちからも大きな期待を持って迎えられた。この年、研究所主催で開催された北京会議報告会にあふれるほど多くの女性たちが詰めかけたのを憶えている。そうした社会教育とアカデミズムの連携のパイプ役を果たしたのが國信先生であった。その後も研究所は社会教育（地域の女性たちの経験）から生まれたテーマを理論化し、教育プログラム化するなど社会教育からずいぶん鍛えられたと思っている。

【文部省委託事業】

研究所開所2年目の1996年、研究所が文部科学省（旧文部省）から青年男女の共同参画推進の委託を受けたこ

とで、國信先生と私たちは怒濤の1年を過ごすことになる。2泊3日のセミナー、シンポジウム、ワークショップ、女性学関連講義の有効性調査など大変ではあったが、多くの関係者の協力もあって実り多い事業を実施することができた。とくに、2泊3日の宿泊集中セミナーは、講義だけでなく、学生の研究発表や参加型のワークショップ・ロールプレイングなども取り入れ密度の濃いものになった。当時新進気鋭だった講師の伊田広行さんも泊まりがけで参加してくださり、私たちは学生たちと夜を徹してジェンダーやセクシュアリティについて語り合った。男女共学でなかったらこんなにディスカッションが盛り上がることはなかっただろうと共学の良さをかみしめたものである。

【国際交流】

2000年代のはじめは、國信先生が東アジア女性フォーラムの事務局長に就任したことで、外国の方を招いてのシンポジウムなどを頻繁に開催することができた。「女性への暴力」や「女性と開発」をテーマとした刺激的なシンポジウムやセミナーは國信先生がいなければ実現できなかったものであった。

こうして振り返ってみると、國信先生が持ち続けていたジェンダー平等への熱い思いを改めて確認することができる。ジェンダー・女性学研究所に限ったことではないが、組織を動かしていく原動力は携わる者の熱い思いであることは確かだと思う。

研究所開設前後と國信潤子先生

本学名誉教授 富安 玲子

國信潤子先生が定年までを残して、ご健康上の理由から退職されるとの知らせは、驚きと共に、改めて本学の教育理念の原点を振り返る機会となりました。

本学が学園創立当初より掲げている「10年先20年先にも役立つ教育」という、その流れの中で、1987年オムニバス形式での授業「女性と社会」は開講されました。その5年目には、折しも大学設置基準の改正によって、本学でも教養科目の検討が行われ、8つの科目群のひとつとして「女性と社会」科目群が設定され、女性学関連科目の充実を図ることになりました。それまでは、英文学、仏文学、心理学などの女性教員を中心にして、学外講師の援助を受けながら、学生たちに女性の主体的な生き方について考えてほしいとの願いを結実させてきましたが、日を経て、科目充実を図るときに、女性学の専門家の必要性が切実なものとなってきました。そのとき、期待に答えて1993年着任されたのが國信潤子先生でした。以来、先生は「女性学概論」「フェミニズム論」等を担当され、また、豊富なネットワークを駆使してオムニバス科目「現代社会と女性」をコーディネートされるなど、この領域の授業が深い展開を見るようになりました。そして、1994年、ジェンダー・女性学研究所の

開設と同時に、國信先生が所長として就任されたのでした。

1995年の共学化に際して、女性問題は、男性問題でもあり人間としての生き方に関わることであり、人権の問題でもあるとの認識を一層明確にして、科目名も「女性学・男性学概論」「現代社会とジェンダー」等に変更されていきました。こうして、國信先生を中心に教育体制は盤石なものとなり、大学の姿勢は学外に向けても発信力を強めていきました。

國信先生の所長としての9年間は、1999年の男女共同参画社会基本法制定によって、ジェンダーへの意識も高まり、その一方で反論も根強いものがありながらも、社会は着実に変化していった時期でもありました。先生はその動きのオピニオンリーダーとして、国内外を問わず、精力的な活躍をされました。それらのご活躍の成果を研究所に、そして学生たちへの教材にと確実にフィードバックされる姿勢は、そのバイタリティ溢れるお姿とともに、後に続くものたちの大きな刺激となりました。

今に息づく本学のジェンダー教育の曙に思いを馳せ、國信先生に感謝を捧げると共にご健康回復をお祈り致します。

第5回 「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 開催

1月20日(金)に第5回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会を開催致しました。

今年度は、文化創造学部より2名、文学部より1名の報告がありました。学部をこえて、ジェンダー論関連の研究を先行研究にとりあげたり、ジェンダー視点で調査を行った研究が紹介されました。卒業論文を書きながら就職活動をしなければならなかった苦労話、研究をすることで自分の将来設計に役立てようと考えたことなども披露され、後輩たちにも大いに参考になる内容でした。以下は報告者の顔触れと卒業論文のタイトルです。

「友情」を解きほぐす

<文化創造学部 文化創造学科 表現文化専攻> 川崎 紫織



学校外教育とジェンダーの関連性

<文学部 教育学科> 佐々木 拓真

日本社会における女性のワーキングプア

～非正規労働者の視点から～

<文化創造学部 文化創造学科 多元文化専攻> 加藤 有香



報告会の後は恒例の茶話会です。議論の続きも繰り上げられました。



日進市市民協働課主催 平成 23 年度男女平等啓発事業 団体向け研修

リプロダクティブ・ヘルス / ライツ研修に参加して

井上 結衣

今回の研修は、今まで触れる機会の少なかった話題である「性」について考えさせられるものでした。テーマであった「リプロダクティブ・ヘルス / ライツ」(略してリプロ・ヘルス)とは「性と生殖」の観点において、人間が生涯にわたって自分の健康を主体的に確保することを目指そうという概念のことだそうです。私は「人生において自分のことは自分で決める意識を持つ」ことだと解釈しました。

研修のはじめに参加者同士で自己紹介をした際に、30～70代と幅広い年齢層の方々が参加されていることが分かりました。そこで、先生に「女性が自己紹介の時にフルネームで名乗ることは少なく、「団体名+名字」で自己紹介をされることが多い」と指摘されました。これは女性の主体性の意識の低さを示すそうです。また、「〇〇ちゃんママ」や「〇〇さんの奥さん」などと呼ばれがちだという話にも、なるほどと思いました。一個人としての“自分”である前に、誰かのための“自分”であるという意識が日本人の女性は高いようです。ここからリプロ・ヘルスの話題に入り、自分の体を知って好きになり、大切にすることの重要性から教えられました。妊娠2か月の小指ほどの大きさしかない赤ちゃんから妊娠10か月のずっしりと重い赤ちゃんまで、赤ちゃんの人形を抱いてみるという場

面では命の重さを体で感じるという貴重な体験ができました。

日本におけるリプロ・ヘルスの基本概念は女性の自己決定だそうです。日本においては、「性」に関する話題はタブー視されてきたので心身の発達に相応した教育がされていないそうです。確かにそれはとても実感していることでした。たとえば、ドイツでは性教育の教材ビデオで登場人物が裸であることがあるそうです。これは衝撃的でした。勿論、こういった教材にはデメリットもありそうですが、表面的に当たり障りなく教える日本よりもオープンでいいのかなと思いました。

女性が男性とセックスをするとき、避妊の責任は男女五分五分であっても、望まない妊娠をしてしまう可能性があります。女性は自分の体について詳しく知り、妊娠、出産、中絶、避妊、不妊、性感染症、更年期障害など生涯にわたる健康について考え、決定していくことが重要だと思います。と同時に、セクシュアル・マイノリティについて勉強している私としてはヘテロなセクシュアリティに限った話であったので少し偏っている気もしました。

(本学文学部国文学科2年)

第4期

連続講座のお知らせ

「キャリア・労働とジェンダー」(仮称)

講師

福沢恵子 さん (昭和女子大学客員教授)

伊田広行 さん (立命館大学大学院非常勤講師)

竹信三恵子さん (和光大学教授)

開催日程と場所(予定)

6月14日(木) 13:30-15:00(長久手)

6月20日(水) 11:10-12:40(長久手)

6月28日(木) 15:10-16:40(星が丘)

詳しい開催日時、場所につきましては、後日愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所ホームページに掲載いたします。どうぞお気軽にご参加ください。

<2012年度(前期/後期)>

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

開放講座

女性学・男性学(前期/後期)長久手/
(前期)星が丘
講師 / 中島美幸

<問い合わせ先>エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23
TEL: 052-783-1665 FAX: 052-783-1621(直通)
受付時間: 土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/extension/index.html>

<申込期間>

後期 7月23日(月)~8月20日(月)必着
*前期申込受付期間は終了致しました。

聴講・科目等履修(学外向け)

人権・ジェンダーと教育(後期)長久手
講師 / 小出隆司 ほか

ジェンダー論(前期集中)星が丘
講師 / 三輪敦子

<問い合わせ先>教務事務室

〒480-1197 長久手市片平9
TEL: 0561-62-4111(代表) FAX: 0561-63-1844
受付時間: 土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/faculty/kamoku/index.html>

<申込期間>

後期 6月18日(月)~6月29日(金)必着
*前期申込受付期間は終了致しました。

施設利用案内

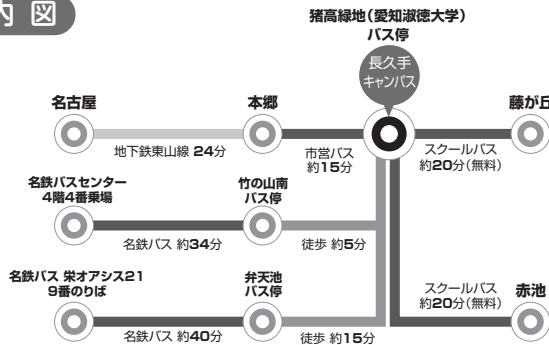
どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友達と一緒にでも大歓迎です!

開室日 毎週月曜日~金曜日

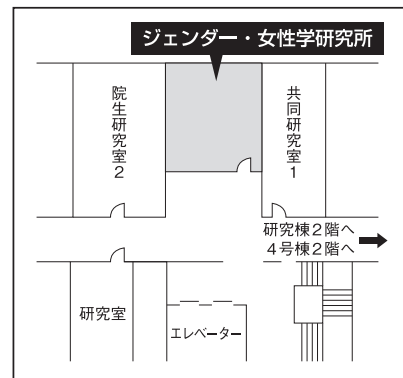
開室時間 9:00~17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



■長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

学生の同好会であるジェンダー研究会は部員数も活動回数もともに増え、週2回お昼休みと夕方に集まり活発に研究・企画を進めています。2月に行われた日進市市民協働課主催のハーモニーフェスタにも参加し、ジェンダーについての説明、セクシュアル・マイノリティの基礎知識、研究会の活動や当研究所の紹介をパネル展示しました。また3月初めには本研究所からジェンダー研究プロジェクトIIの成果として研究書『ジェンダーと教育—横断研究の試み』が発行されました。(石河 敦子)

ASU・IGWS2011年度

運営委員

酒井晶代(所長兼) 佐藤実芳 白石淑江
菅野育子 建部貴弘 平林美都子
森井マスミ 米倉五郎 若松孝司

事務担当

石河敦子